

日中対照表現の授業について

藤 田 昌 志

On Teaching Contrastive Expressions between Japanese and Chinese

FUJITA Masashi

〈Abstract〉

This practical report is concerned with teaching contrastive expressions between Japanese and Chinese, which was taught by the present writer. The content of this teaching is roughly divided into two. One is essentially teaching contrastive expressions between Japanese and Chinese, which used selected teaching materials. The other is teaching comparative culture between Japan and China. The former is divided into three categories. : 1. teaching homographs between Japanese and Chinese 2. teaching distinctions between Japanese and Chinese expressions 3. teaching ways of translation between Japanese and Chinese. The latter is understanding Japanese culture and the Chinese one, using books concerned with these subjects.

After teaching, the following points are revealed, : When teaching contrastive expressions it is necessary that learners have fundamental knowledge about the two languages, otherwise teachers must present concrete examples of correct and incorrect use of Japanese expressions (which are ranked by difficulty). When teaching comparative culture between Japan and China it is necessary that teachers select compositions of high quality which serve the purpose.

一. 序

筆者は1997年10月に三重大学留学生センターに着任以来、当該留学生センターの日本語教育の体制作り、日本語教育に従事してきたが、1998年の4月からは専門性を生かす意味からも日中対照表現の授業を担当してきた。対象は中国語を母語とする日本語学習者で（当初は、中級Ⅱコースに限っていたが2002年度からは中級Ⅰコース以上の学生に受講対象を広げた）⁽¹⁾、目的は母語を外国語学習（この場合は日本語学習）に意識的、かつ効果的に生かしていくことである。日本語と中国語の場合は「漢語」（以下「」は日本語、“ ”は中国語を表す）や同形異義語、表現方法の相違等の学習上の困難点が多く存在する。日中対照表現の授業はそうした困難点を学習者の母語である中国語と目標言語としての日本語との対照を通して克服しようとした授業である。

二. 過去の日本語と中国語の対照研究

次に、日中対照表現の授業（＝教育）のベースになる過去の日中対照表現の研究について主要なものを振り返ってみたい。

文化庁から出されている『中国語と対応する漢語』は、語レベルでの日本語と中国語の意味が同じ場合、オーバーラップする場合、全く異なる場合等についてまとめたものである。また句レベルの例が二つぐらい提示してあるが、惜しむらくは違うのはわかったがそれでどうなるのかという疑問に対する答えが明晰な形で出ていないということがある。辞書の性格の当該書にそこまで要求するのは酷であるかもしれないが、そのことは、そもそも言語の対照とは何なのかといった根源的な問いへと通がっていく問題である。たとえば「迷惑」「迷惑」という語がある。「迷惑」は「その人のした事が元になって、相手やまわりの人がとばっちりを受けたりいやな思いをしたりすること」⁽²⁾ という意味であり「迷惑」は「辨不清是非；摸不着头脑」⁽³⁾（「なにがなんだかわからない」）という意味であると思われる。また両語の実際の句レベル、文レベル、二文以上のレベルでの使い方がわからなければ、また両表現の使い方の相違がわからなければ、その「対照」は「底の浅いもの」と言わざるをえない。このことに関連するものとして、『おぼえておきたい日中同形異義語 300』という本がある。当該書では、日中同形異義語を一．意味・用法の異なる同形語（下位分類として（一）意味・用法にほとんど関係のない同形語（ex. 大名、料理）（二）意味・用法にある程度のある同形語（ex. 汽車、講義）の二つがある。）二．意味・用法の近似している同形語（次の4つの面から考える必要があるとする。つまり1．語義の範囲の違い（ex. 道具）2．語義の強弱の違い（ex. 抱負）3．語義の色彩の違い（下位分類として①感情の色彩の違い（ex. 夫妻）②褒貶の色彩の違い（ex. 自愛）③文体の色彩の違い（ex. 起床）の三つがある。）4．語の作用の対象の違い（ex. 参加）である。）三．意味の一部分が共通である同形語（下位分類として（一）日本語に他の意味がある同形語（ex. 勝負）（二）中国語に他の意味がある同形語（ex. 緊張）（三）日中両語とも他の意味がある同形語（ex. 不自由）の三つがある。）の三種類に分け、それぞれ句レベル、文レベルの例を挙げている。当該書においても句レベル、文レベルでの例を挙げているにもかかわらずその対照はやはり底の浅いものとの感が拭い去れないのはどうしてであろうか。思うに語レベルでの対照という限界もさることながら、同形異義語の中でどの語が誤用を生じやすいのかといった視点が弱いのではないだろうか。中国語を母語にする日本語学習者が誤用を生じやすい日中同形異義語はどういうものであり、更にはそれらが実際に文及び二文以上のレベルでどのような誤用例として表されているかを見ていく必要があるのではないか。ただでさえ、まぎわらしい日中同形異義語についてはそうした文及び二文以上の

レベルの中で誤用例や例を提示していく必要があるように思う。

日中対照表現の研究として学術面の成果が最も大きいものとしては『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』『同（下）』がある。教育上、所収の以下の論文にはとりわけ注目する必要がある。

荒川清秀「日本語名詞のトコロ（空間）性－中国語との関連で－」では名詞のトコロ性の有無が中国語と日本語で異なることを明確にしている。また同じくトコロ化する場合にもズレがあることもあり日本語では「おさらの上」というが中国語では「おさらのなか」としか言えないことにも言及している。両言語の恣意性の相違を明晰に考察し、結果、誤用例の生じる原因についても示唆的意見を述べた論文となっている。

杉村博文「遭遇と達成－中国語被動文の感情的色彩－」では中国語の被動文が「難事が話者本人或いは話者の感情が移入された存在によって達成された」⁽⁴⁾ 場合にも用いられることを指摘し、それを「自己称揚の被動文」と呼んでいる。そうした中国語被動文の存在は、日本語の話者中心性と相容れず、「私はついにこの字をまともに書けた。」（正）という日本語を産出できず*「この字はついに私によってまともに書かれた。」（*は誤用を表す。）（“这个字终于被我写像样了。”）のように表現してしまう可能性の存在を示唆している。

大河内康憲「日本語と中国語の同形語」では「日本語には類似の意味の和語と漢語の分業があるが、中国語にはそれがない」⁽⁵⁾ こと、「漢語でなければ表現できない思惟の領域が存在する」こと、「中国語では語を構成する漢字一字一字の意味がなお語の中で生きていること」、それにひきかえ「日本語では漢語は二字、三字あわせて一意味単位として認識される」ことが指摘されており、いずれも深い認識を提示したものとなっている。

また、『日本語教育のための誤用分析－中国語話者の母語干渉 20 例－』は「逆らう」や「ぶつかる」を『第 2 種の他動詞』とすることを支持し、中国語母語話者による*「彼は私にからかわれたんだ」という誤用例が、「中国語には日本語における一人称代名詞＞人間名詞＞無生物名詞といった名詞ランキングが基本的に存在しないことから」⁽⁶⁾ 産出されることを指摘し、すぐれた日中対照表現の研究書ともなっている。

以上の研究書は日中対照表現の研究や授業を行う際の必読書である。

三. 日中対照表現の授業について

日中対照表現の授業を始めてから 4 年余りが経つが、次にその授業内容、授業上の工夫、授業の自己評価等について述べてみることにする。

まず、授業内容であるが、大きく分けて二つある。一つは語学的な教材を使った本来の

日中対照表現の授業であり、もう一つは日中比較文化論的な授業である。

まず語学的な、本来の日中対照表現の授業について述べる。はじめに使った教材として挙げたいのは、『同じ漢字でも』である。『同じ漢字でも』は既述の「同形異義語」についてエッセー風に述べた本である。著者は「あとがき」で自ら述べているように「北京で生まれ、女学校二年生まで日本人学校で、日本語の中で生活をしてきた」人で、また、「戦後は、かなり長いあいだ日本語を使うこともなく、大学では音楽を専攻した。」日中国交回復後、北京語言学院で日本語を教えるようになり、1982年に来日、1983年から月刊誌『日本と中国』の中で「同じ漢字でも」というコラムを担当し、それは「自分が日本語を勉強しているうちに、自分の母国語－中国語との違いを感じたものを調べて、そのメモを発表した」と言った方がよりの確ではないかと思うものであるが、当該書はそのコラムをもとに書き直し、未発表のものと併せて一冊にまとめたものである。とり扱っている同形異義語には「愛人、青、足下、油、柏、下水、質問、大意、人間、馬上、真面目、湯」などがあり250余りの語についてエッセー風に日本語と中国語の相違を記している。

『同じ漢字でも』を使った授業では、たとえば「青」の場合を例にとると「語句」の読みと《内容要約》シートを事前に配布し、『同じ漢字でも』の本文の予習用に使い、併せて授業後の復習に役立つようにした。次はその《内容要約》シートの例である。

《 内 容 要 約 》

日本語の「青」も中国語の“青”も _____ と緑色の二つの色彩を意味しているが、中国語の“青”には _____ の意味も含まれている。たとえば“青布”というのは _____ 布そのものを指している。実は日本語でも特殊な場合だけだが「青」には _____ のいみもあり、たとえば _____ というのは _____ 毛色の馬のことであり、俗に _____ の代表名としても用いられている。

参考までに《内容要約》の空欄に入れる語を記すと、藍色の青 黒 黒い 黒 青毛黒い 馬一般 となる。

『同じ漢字でも』を日中対照表現の授業で使用して《内容要約》というシートも工夫して用意したのであるが、教えた印象としてはやはり同形異義語という語レベルの理解だけでは物足りない感じが残るのはいなめない。『同じ漢字でも』の本文では句レベル、文レベルでの用例も日本語、中国語両方で提示してもいるが、物足りなさが残る。それは、運用力の向上に結びつかないことへの漠然とした焦立ちの表れのようにも思える。

同形異義語についてはその意味の相違を単に認識するだけでは足りないということである。その不足感を補い運用力を向上させるためには既述のように、文及び二文以上のレベルで誤用例、正用例を提示し、また、日本人がおかしいと思う中国人母語話者の同形異義語の実態調査、中国人母語話者自体が難しいと思う同形異義語の実態調査を行い、それにもとづく教材作成を行って、授業に反映させることが必要であると思う。辞書的記述でなく、より運用力の面から必要度による同形異義語のランクづけを行う必要があると考える。

次に使った教材としては私の書いた論文がある。私は今まで一連の「日中対照表現論（日→中）」を書いてきたが、それらには日本語の例文とそれに対応する中国語訳が豊富に付いているので中国語母語日本語学習者にも理解しやすいだろうと考え、例文を意識的に提示しながら日本語表現と中国語表現の相違を理解するための授業を行った。

私の書いた一連の「日中対照表現論（日→中）」やそれに関連するものには主要なものとして次のものがある。①「加訳（日→中）について」②「受身文（日→中）について」③「中国語を母語とする日本語学習者の誤用について」④「日中対照表現論－「転換」（日→中）について－」⑤「日中対照表現論－「減訳」（日→中）について－」⑥「日中対照表現論－意識（日→中）について（Ⅰ）－」⑦「日中対照表現論－意識（日→中）について（Ⅱ）－」。

①は日本語表現を中国語にする際に言葉を付加しなければならない場合があるが、その場合、どのような語を付加しなければならないかについて考察した論文である。授業では当該論文に即して、次の四つについて説明した。一、「数詞「一」＋量詞」の加訳（ex. 「目」→「一双眼睛」／「けりつける」→「踢了一脚」／「なぐる」→「打了一拳」）二、指示代詞の加訳（ex. 「大屋ら三人」→「大屋这三个人」／「うちの主ですよ。菊子の来る、なん年も前からいますよ。」→「那是咱家的主人罗。菊子来的前几年就有。」／「お帰りが早いんで、あなたもどこかお悪いのかと思いました。」→「回来的这么早，还以为你哪儿不舒服呢。」等）三、「具体性」の加訳－（ア）動作の到達点の加訳（ex. 「反町は“妻”の不安を吸収するように柔らかに抱いた。」→「反町为了消除“妻子”心中的不安，把她温柔地抱在怀里」）（イ）動作の方向、方式の加訳（ex. 「いま、動かない方がいいでしょう。」と反町が抱き止めた。」→「“你还是不动为好。”反町上去搀扶他。」）（ウ）動作を表す動詞自身についての具体性の加訳（ex. 「贓品を（かくれ家から）とりだした」→「起出赃来了」／「ポケットからハンカチをとりだす。」→「从兜儿掏出手绢儿来。」／「本箱から本を取り出す。」→「从书橱里取出书来。」）（エ）時についての具体性の加訳（ex. “当天”“每天”の加訳）四、より言語習慣上の理由が色濃い加訳（ex. 「まあ、お客さんものですの？」真紀子が目を見ひらいた。→「啊，您也有这个感觉吗？」真紀子不由得睁

大了眼睛发问。／「お母さんが先に死ぬなんて、ねえ」→“真没想到妈竟先走了一步，唉！”）。

また、論文内容に関連して中国語を母語とする日本語学習者が、一、については数量詞（一本、一冊等）を多用し誤用例を産出すること、二、については「このように早く」などと「このように」や指示代詞をそのまま日本語にすることによって誤用例を産出すること、三、については*「住所が紙の上に書いてある」（“地址都写在上面了。”）のような誤用例（又は不適切な例）を産出してしまふことがあること、四、については「思わず」（“不由得”）「意外にも」（“竟”）などの表現を多用することによって誤用例を産出してしまふことがあること、等についても言及し、日本語と中国語の表現の違いについて理解を深めるように注意を喚起した。

②は日本語と中国語の受身文の相違について論じたもので、中国語の受身文が本来、“不如意”（「不本意」）“不企望”（「待ち望まないこと」）を表すことから、日本語に比べて使用範囲が狭いこと、日本語が受身文であるのに中国語が受身文でない場合の分析（「主客転換」等）等を内容としている。授業では話者中心性の表現の多い日本語と〔動作主－動作〕という表現の多い中国語の相違について説明した。

③は中国語を母語とする日本語学習者の誤用について ○中国語とそれに対応する日本語の表現形態が一对二（又は多）の関係にある場合の誤用 ○日本語に対応する表現が中国語に明示的（explicit）に存在しない場合の誤用 ○中国語に対応する表現が日本語に明示的に存在しない場合の誤用 ○言語表現の習慣上、「転換」（日⇔中）という操作を行わないと「適切さ」（appropriateness）に欠け、はなはだしい場合には誤用となるもの、の4項目に分類し分析、考察したものである。授業では、それぞれの項目について具体的に*「いつも部屋にとじこもって勉強している私たちのような学生に対して、旅行は命の洗濯のようなものです。」 *「だめだと知りながらも彼を頼んだ。」 *「彼は大学受験に参加する申込をした。」 *「おかしは私に食べられた。」等の誤用例を挙げて、その誤用例の生じる理由を中国語との対照によって説明し、誤用例対策とした。

④は既述の受身文（日→中）の場合の「主客転換」だけでなく、使役／非使役、使役・受身（日）、「～てもらう」構文（日）、人（動作主）中心／事物中心の各表現の日中語間における「転換」（日→中）について論じたものであるが、授業では中国語では〔動作主－動作〕という表現が多いのに比べて、日本語では話者中心、事物中心の表現が多いことが傾向として言えることを具体例を通して説明した。

⑤は日本語では明示的（explicit）表現となるのに中国語では非明示的（implicit）表現となる場合について分析、考察したものであるが、授業では取り立て詞の「でも」「ぐら

い」「など」「も」、「ようだ」（比況）、「そうだ」（様態）、「～ている」「～である」「～てしまう」「～ておく」等のアスペクト類の表現が減訳（日→中）されることを具体例を通して説明し、中国語を母語とする学習者は日本語を学習する際に、とりわけ上記の表現について注意しなければならないことを強調した。

⑥⑦は「意識（日→中）」について間接的表現、反語表現、「逆から」の意識、説明的表現、意識の起こる理由からみた分類等の日中語間の表現の関係について論じたものであるが、授業では、日本語が間接的表現が多く、中国語が反語表現が多いことについて具体例を通して説明した。

以上のように筆者の一連の「日中対照表現論（日→中）」の論文を使用し、誤用例や用例を豊富に提示しながら日中対照表現の授業を行ったわけであるが、今、ふり返って思うのは、中国語を母語とする日本語学習者が、（目標言語としての日本語について文法知識を持っているのは当然のこととして）中国語学の知識を持っているとは限らないこと、いや基本的に持っていないと言った方がよいこと、そのため理解が不十分となる嫌いがあるということである。逆に日本語を母語とする者が外国語を勉強する場合を考えてみれば、そのことはより理解しやすいであろう。たとえば日本人が中国語を勉強するとしてみよう。一般の日本人は「取り立て詞」ということばなど知らないであろう。しかし、「など」「も」「でも」という表現は無意識に使い、用例も挙げられるだろう。とはいえ、その表現が中国語の表現とどのような対応関係にあるのか、また、ないのか、そしてないといっても他の視点等からの表現とは対応があるのではないのかといったことは基本的に両言語の異なるコードの文法体系を二つとも理解していないとわかりにくいことであろう。私の対照表現というのは、そうした無意識に使用している母語表現の文法知識を持った上で目標言語としての外国語の文法、表現との相違について理解し、より誤用の少ない、正確な外国語力を身につけようとするものである。やはり、基本的に両言語の文法知識を持つことが前提となるのだと思う。しかし、日本語の授業は現状では実際の語学力の向上が第一に要求されるのであるから、そこまで求めるのは難しいかもしれない。それなら洗練された正用例（日→中、中→日）、典型的な誤用例を提示していくということを考えていく必要があるのではないか。現状ではそれが一番、望ましいことであると言えるのかもしれない。

次に使用した教材として挙げなければならないのは、『日語学習与研究』に載っていた日本文学の（中国語への翻訳付き）作品や『雪国』とその翻訳である。

まず『日語学習与研究』の日本文学の作品の使用についてであるが、『日語学習与研究』は1979年に創刊された季刊誌でその概容は次のものである。「本誌は国内外の日本語研究についての高水準の学術論文を掲載し、大幅な紙面をさいて国内外の日本語界の研究動態

の紹介を行い、日本語関係者に活動する場所を提供し、研究成果と教育経験の交流を行う。本誌は更に翻訳理論、日本の古典と現代文学の対訳注釈付き作品、経済貿易文の訳注及び中国語と日本語の比較研究の文章を掲載し、翻訳業の繁栄を促進する。併せて「日本文学賞析」欄を設け、専門家に日本文学愛好者のために日本文学の宝庫の中の佳作を紹介してもらっている。また、「学習園地」「試題と分析」等の欄を設けて、レベルの異なる日本語独習者の学習上の問題点を解決するようにしている⁽⁷⁾ という日本語の研究と教育の両面に渡って、総花的に対応しようという季刊誌である。上記の中に「(日本) 現代文学の対訳注釈付き作品(中略)を掲載し」とあるが、授業ではその部分を使用し、現代日本文学の作家の作品、たとえば妹尾河童の『少年H』の抄訳、川端康成の「かけす」、井上靖の作品など(対訳注釈付き)を配布し、日本語表現と中国語表現の異同に気づかせるように努力した。『日語学習与研究』の日本現代文学の対訳注釈付き作品を使用した授業について、今、ふり返って思うのは、「対訳注釈付き」は学習者が意味不明瞭な際に意味を把握するのには役立つが、それ以上のさしたる利点はないということである。『雪国』とその翻訳⁽⁸⁾についても同様のことが言える。

続いて、最後に授業で使用した教材として挙げたいのは『中国語世界』である。『中国語世界』は1998年6月17日に第三種郵便物許可を取得した、日本人の中国語学習者向けに発行されている週刊誌である。その中には原文が中国語で訳文が日本語の頁がある。それを授業で使用したのである。中国語学習者向けの週刊誌を日本語学習者向けの教材に使用するのは目的が異なるから不適であると思われるであろうが、訳文(日本語)が優れているため、また概訳という場合もあるため、日本語学習用として使用できると判断した。それで教材として採用した。具体的には、まず中国語部分(語の訳も含む)を黙読または音読させ、大意をとらせてから日本語部分を音読させた。それから、意味不明な個所をたずね質問に答えるようにした。概ね、中級前期以上の学習者なので対訳があると意味の把握は容易なようであったが実際に、表現を使いこなすところまでいたったかということ、それは今後の課題と言わざるをえない。

難しい日本語表現、日本語の文(章)には主要なものとして次のようなものがあった。
 (() 内の数字ははじめが『中国語世界』のNo.、次が掲載頁である。) ○「～5人が死亡、272人が負傷し、～」(“～已造成5死272伤。” 201, 6) ○「僕にも覚えがある(から)」(“(因为) 我自己也在经历。” 201, 17) ○「この手の店」(“这个商店” 202, 9)
 ○「そのニュースは彼から聞いたけど、やっぱり信じられない。」(“虽然他告诉了我这个消息，但我还是不敢相信。” 204, 7) ○「僕はレッテルを貼られるのが大嫌いなんだ。」(“我不喜欢别人给我贴上一个标签，～” 204, 17) ○(～は)「若者に人気となった。」

(“～受到青年人的欢迎” 205, 4) ○「このように日本から来た芸術である生け花は、すっかり上海女性に受け入れられているようだ。」(“由此可以看出，插花这一来自于日本的艺术形式已被上海女性所接受。” 205, 6) ○「個人のための切手の発行は、これが中国初である。(“这是中国第一次为个人发行个性化邮票，～” 205, 7) ○「家族になんと言ったらいいの？～」(“叫我怎么对家里人说，～？” 205, 14) ○「秋明から聞きました。」(“秋明说的。” 205, 14) ○「35歳以下の公務員は普通話試験で80点以上を得点しなければ、職場にいられない(という)。」(“35岁以下的公务员在普通话测验中必须达到80分才能上岗。” 207, 9) ○「こんばんは。今日、ここを予約していた山口です。」(“晚上好。我是山口，今天跟这儿预约好的。” 207, 11) ○「開幕戦は、前大会の覇者、フランスと初出場のセネガルによって行われた。」(“开幕战是由上届冠军的法国队出战首次参加比赛的塞内加尔队。” 208, 4) ○「こんな大勢の人に祝福してもらえるなんて、私は世界一幸せな花嫁です。」(“有这么多人的关心，自己是世界上最幸福的新娘。” 208, 6) ○「～ところが、これが思いがけない面倒を招いた。」(“谁知这却惹来了意想不到的麻烦。” 208, 9) ○「夏季にロブノール湖踏破に成功したのは、李勇さんが世界で初めて。」(“李勇～成为世界上第一个在夏季成功地徒步穿越罗布泊的人。” 212, 6) 以上の日本語表現、日本語の文(章)(とりわけアンダーライン部分)が中国語母語日本語学習者にとって難しいのは、日本語とそれに対応する中国語表現との差が大きいからである。日本語学習の期間が短く、接する日本語の量が少なくでは類推が不可能に近いのである。

次に日中比較文化論的な授業について述べる。

まず使用した教材として邱永漢『中国人と日本人』がある。授業では学習者にとって知っておく必要のある章、たとえば「日本文化の本流はフリガナ文化」などをコピーして配布し読ませ、意見を聞くという形を採った。ある者は邱永漢氏の考えに疑問を持ち異論を述べたが、そのこと自体は問題ではない。むしろ難しいのは、比較文化論的な文章を教材とした場合、どの考えが正しいのかははっきりしないことがあるということである。比較文化論的な文章を扱う際にはその点に注意し、より客観性の高い、質のすぐれた文章を選ぶようにしなければならないと思う。

また、『日本と中国「どこが違うか」事典』を教材として使用した。当該書は日本と中国の違いについて、トピック(ex. アパート、宴会、割り勘等)別に書かれた事典であるが、単に読んでいくだけでは面白味に欠けるので書かれたことについてできるだけ各自の意見を述べてもらうようにした。

その他、厳密には日中比較文化論的とは言えないであろうが『日本文化を中国語で紹介する本』を教材として使用し、日本の年中行事や日本人の生活様式について日本語と中国

語訳の二つで書かれた文章によって日本理解を深めるようにした。当該書は写真やイラストが豊富なのでそれが内容理解の一助となっている。

四. まとめと今後の展望

以上、筆者の行ってきた語学的な教材を使った日中対照表現の授業と日中比較文化論的な授業について述べてきたが、前者については前提として学習者に両言語についての語学的な知識が求められるか、または具体的な正用例、誤用例（日中対照）の提示が必要とされる。また、後者についてはより客観性、質の高い文章（もちろん内容を含む）を選んでいくようにする必要がある。最近日本語に堪能な孔健や莫邦富といった人たちの比較文化論的な書物も出版されるようになってきている。また筆者が授業で教材として使用した『中国語世界』のような週刊誌も出るようになってきている。日本と中国の間にはさまざまな問題が横たわっているが、まず言葉の問題をクリアしていこうとするのが最も正統的な対処法であろう。

今後も、「日中対照表現」を深化させていきたいと考える次第である。

注

- (1) ここに言う中級Ⅰコースとは「大学教育を受けるために必要な基本的な読解力及び聴解力、文章表現力の育成」を到達目標とするコースで、中級Ⅱコースとはその上の「大学教育を受けるためのより高度な読解力及び聴解力、文章表現力の育成」を到達目標とするコースである。
(cf. 三重大学留学生センター『2002年度 日本語授業案内 後期用』)
- (2) 金田一京助編著 柴田武、山田明雄、山田忠雄（1992）『新明解 国語辞典』三省堂
- (3) 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編（2002）
- (4) 大河内康憲編集（1992b） pp. 53
- (5) 同（4）書 pp. 186
- (6) 張麟声（2001）p. 134
- (7) 対外経済貿易大学《日語学習与研究》編輯委員会（2001）《日語学習与研究》第二期裏表紙の中国語による説明を筆者が日本語に訳したもの。
- (8) 尚永清訳解（1997）

参考文献

- (1) 文化庁（昭和53）『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- (2) 中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編（2002）『現代漢語詞典 2002年増補本』商務印書館
- (3) 上野恵司・魯曉琨共著（1995）『おぼえておきたい日中同形異義語 300』光生館
- (4) 大河内康憲編集（1992 a）『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』くろしお出版
- (5) 大河内康憲編集（1992 b）『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』くろしお出版

- (6) 荒川清秀 (1992) 「日本語名詞のトコロ (空間) 性ー中国語との関連でー」 同 (4) 書 p. 81
- (7) 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析ー中国語話者の母語干渉 20 例ー』 スリーエーネットワーク
- (8) 金若静 (昭和 62) 『同じ漢字でも』 学生社
- (9) 藤田昌志 (1991) 「加訳 (日→中) について」 『大阪産業大学論集』 人文科学編 74 号
- (10) 藤田昌志 (1993) 「受身文 (日→中) について」 『大阪産業大学論集』 人文科学編 79 号
- (11) 藤田昌志 (1994) 「中国語を母語とする日本語学習者の誤用について」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第 3 号
- (12) 藤田昌志 (1995) 「日中対照表現論ー転換 (日→中) についてー」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第 4 号
- (13) 藤田昌志 (1996) 「日中対照表現論ー「減訳」 (日→中) についてー」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第 5 号
- (14) 藤田昌志 (1999) 「日中対照表現論ー意識 (日→中) について (Ⅰ) ー」 『三重大学留学生センター紀要』 第 1 号
- (15) 藤田昌志 (2000) 「日中対照表現論ー意識 (日→中) について (Ⅱ) ー」 『三重大学留学生センター紀要』 第 2 号
- (16) 対外経済貿易大学<<日語学習与研究>>編輯委員会<<日語学習与研究>><<日語学習与研究>>雑誌社
- (17) 尚永清訳解 (1997) <<雪国>>商務印書館出版
- (18) 邱永漢 (1993) 『中国人と日本人』 中央公論社
- (19) 金山宣夫 (1989) 『日本と中国「どこが違うか」事典』 日本実業出版社
- (20) 舩谷鋭、小早川眞理子 (1999) 『日本文化を中国語で紹介する本 用中文介绍日本文化的书』 ナツメ社